中学校における詩の指導

――一年生の授業実践を通して――

杉本麗次

はじめに

昨年の十一月に、授業で再び詩教材を扱うことになり、ひとつの学級で、前時に次時の予告として詩を学習することを告げると、生徒たちは口々に「いやじゃあ」という予期しない反応を返してきた。詩に対する抵抗感のようなものを、多くの生徒が抱いているようであった。

私が扱っている中学一年の教科書（光村図書）では、最初から二番めの教材にまず詩が登場し、新川和江の「野のまつり」、八木重吉の「母をおもう」、黒田三郎の「海」の三作品を、入学後間もない生徒たちは清新はつらつとして、楽しく読み味わうことができた。

ところが十一月には前述のようなありさまである。そのように、生徒を詩嫌いにさせた責任の一端を私なりに感じるが、他にもその原因は考えられるのではないか。詩が嫌いな生徒たちは、きまって「詩はわからないから」だと言う。わからないのではおもしろいはずはない。彼らが小学校の六年間に、どういう形で詩に出会い、どういう詩の授業を受けてきたかは知らないが、少なくともわからない詩を無理やり読ませられ、教師の一方的な解釈を押しつけられてきたのではあるまいかと推測するのである。このことは、私自身の受けた詩教育も大方そうであったし、その結果今だに私自身、詩がわからないでいる。

私は、受け持っている学級の実態がそうである以上、そのような生徒の、詩に対する抵抗感というものを無視できないと思い、次の二点を指導上の課題とした。

ひとつは、生徒から詩に対する抵抗感を取り除いてやるためにはどうすればよいか工夫をすること。

もうひとつは、中学一年生の生徒たちの詩精神の実態はどのようなものであるのかを把握すること。

とくに後者の課題は、漠然とはしているが生徒たちがどのような詩を欲し、そこに彼らのどのような精神発達が見られるかという大きな問題を含んでおり、また、それを手がかりとして詩教材選択の観点を探りたいというねらいをもたせたいと考えたのである。

一、生徒はどんな詩を好むか

――アンソロジー作りの指導を通して――

十一月に新しい詩の単元に入り、「はじめに」で触れたような生徒の実態を目の前にして、私はそれまでに考えていた指導案の変更を余儀なくされた。教科書教材は、小野十三郎の「赤いタビ」と金

井直の「木琴」であったが、この二詩をすぐさま教室に持ち込んで授業をすすめたばあい、これらの詩と子どもたちとの接点を見いだせないでいたから、先ほどの、詩に対する生徒の抵抗感は除去できるどころか、増幅さえしかねないと思われた。

それで、現代詩の授業実践書をむさぼり読み、その活路を求めようとした。その中で、足立悦男氏の著した『中学高校現代詩の授業』（昭53・11、文化評論出版）に収められている氏の数々の実践に出会い、胸の高なるのを押さえきれなかった。氏は詩教材の「より明確な概念として」「ポエジーということを支柱と」して考えておられるが、そのポエジー（氏はこれを「読者である生徒たちの内からわきでる情感と、詩作品との共鳴によってうまれる心のふるえである」と規定されている。）を生徒たちに感受せしめるような詩の授業を私もしてみたいと切実に思い始めた。しかし、氏の卓越した諸実践がすぐさま私にできるわけもなく、当面の私の課題としてあげていた詩に対する生徒たちの抵抗感を取り除くために、足立氏の実践を利用させていただこうと思った。

同書に収録された数多くの詩作品は、足立氏の柔軟な発想と、ことばを見つめる厳しい眼によって選び抜かれているものであるが、それらの中から私なりに拾い出し、それらに私自身が探してきた詩を加えて生徒に与え、一冊のアンソロジーを作らせてみようと試みたのである。この試みのねらいはおよそ次の通りである。すなわち、生徒たちに多様な詩作品を与えてみたばあい、それらの詩に生徒たちはどのような反応を示すかを見ようとしたのである。また、多様な詩作品を多く与えることによって、生徒たちが持っている多様な感性を発現する場を与えてやり、少しでも詩に対する抵抗感を取り除いてやろうとしたのである。さらに、楽しく詩の学習ができることもねらいとして加えたことは言うまでもない。

さて、選んだ詩は八作品であるが、それを西洋紙一枚に四つずつ印刷し、生徒たちに切り離させ、好きな順番に並べかえさせ、さらに表紙も含めて余白にそれぞれの詩に見合うようなマンガ・カットを入れさせて、一冊の個性あふれるアンソロジーを作らせた。そして、第一位に選んだ詩ごとに小グループを作らせ、そのグループ内で詩を鑑賞・分析させ、後に全体で発表させるという授業課程を組んで実践した。

さて、ここで、選んだ八つの作品を次に紹介しておこう。

はる　谷川俊太郎

はなをこえて
しろいくもが
くもをこえて
ふかいそらが

はなをこえ
くもをこえ
そらをこえ
わたしはいつまでものぼってゆける

はるのひととき
わたしはかみさまと

しずかなはなしをした

ぶどうの房　みつはしちかこ

ぶどうの房が　涙でいっぱい
私のしらない夏が　あなたの上をとおりすぎ
日焼けした　あなたのおもかげは
真夏の木かげのように暗くひっそりしていた
あなたのまつげは深く閉ざされ
私のほおえみをたやすく通してはくれない
九月……私は
また　はじめから　ひざまずいて
祈らなければならないのですか？

いつのまにか少女は　井上陽水

いつのまにか青い空がのぞいている
思いつめた黒い雲は逃げてゆく
君はどこで生まれたの育ってきたの
君は静かに音もたてずに大人になった

木琴　金井　直

妹よ
今夜は雨が降っていて
お前の木琴がきけない
お前はいつも大事に木琴をかかえて
学校へ通っていたね
暗い家の中でもお前は
木琴といっしょにうたっていたね
そして　よくこう言っていたね
「早く街に赤や青や黄色の電燈がつくといいな」
あんなにいやがっていた戦争が
お前と木琴を焼いてしまった
妹よ
お前が地上で木琴を鳴らさなくなり
星の中で鳴らし始めてからまもなく
街は明るくなったのだよ
私のほかに誰も知らないけれど
妹よ
今夜は雨が降っていて
お前の木琴がきけない

赤いタビ　小野十三郎

むっとする
ゆうぐれの地下道。
ぼくのあしに　ふみつけられて
小さな赤いタビが一足おちていた。

それは見るまに
石けりの石のように
ひとびとのくつさきで
あちこちにはこばれ
ついにどこかに消えていった。
木枯らしのふく街で
あの赤いタビを買った人はだれ？
赤い子どものタビをおとした人はいませんか
追いかけて
ここにあるといってあげたいが
ながれる人波。
もまれる人波。

石川啄木

いのちなき砂のかなしさよ
さらさらと
握れば指のあひだより落つ

（短歌集『一握の砂』より）

ぼくはしなない　岡　真史

ぼくは
しぬかもしれない
でもぼくはしねない
いやしなないんだ
ぼくだけは
ぜったいにしなない
なぜならば
ぼくは
じぶんじしんだから

虫けら　大関松三郎

一くわ
どっしんとおろして　ひっくりかえした土の中から
もぞもぞと　いろんな虫けらがでてくる
土の中にかくれていて
あんきにくらしていた虫けらが
おれの一くわで　たちまち大さわぎだ
おまえは　くそ虫といわれ
おまえは　みみずといわれ
おまえは　へっこき虫といわれ
おまえは　げじげじといわれ
おまえは　ありごといわれ
おまえらは　虫けらといわれ
おれは　人間といわれ
おれは　百姓といわれ
おれは　くわをもって　土をたがやさねばならん
おれは　おまえたちのうちをこわさねばならん
おれは　おまえたちの　大将でもないし　敵でもないが

おれは　おまえたちを　けちらかしたり　ころしたりする
おれは　こまった
おれは　くわをたてて考える

だが虫けらよ
やっぱりおれは土をたがさんばならんでや
おまえらを　けちらかしていかんばならんでや
なあ
虫けらや　虫けらや

（なお、他に一編、在校の生徒作品を載せたが、実はこれが雑誌『中学一年コース』からの盗作であったという悲しむべきトラブルが起こり、後に削除せざるを得なくなった。）

私はこれら八つの作品をどのような基準で選択したかという系統性を厳密に考えていたわけではないが、ひとつひとつの作品がそれぞれに個別の詩世界を持っており、何らかの面で生徒たちとの接点が見いだせると考えて選んでみたのである。詳しくは後に触れるとおりである。

さて、アンソロジーを作らせるなかで、私は事前にそれぞれの詩に対して何ら鑑賞めいた指導はせず、生徒のひとり読みによって好きな順に並ばせた。その結果、これらの詩に対して生徒たちが好む順位を次の表に示すことができた。

作品名＼選んだ順位	1	2	3	4	5	6	7	8
虫けら	39 35/4	20 14/6	21 11/10	12 1/11	0 4/6	15 7/8	16 5/11	19 2/17
ぼくはしなない	22 9/13	25 17/8	22 17/5	21 11/10	9 2/7	17 9/8	16 6/10	17 5/12
木琴	21 6/15	17 9/8	20 8/12	13 8/5	25 14/11	22 8/14	15 9/6	15 13/2
ぶどうの房	20 2/18	18 5/13	16 8/8	16 8/8	17 10/7	19 11/8	20 15/5	22 13/9
一握の砂	15 8/7	22 10/12	26 15/11	20 12/8	18 11/7	16 6/10	12 4/8	20 11/9
はる	14 6/8	13 6/7	15 5/10	23 9/14	21 13/8	21 14/7	25 16/9	20 9/11
赤いタビ	13 7/6	15 9/6	15 8/7	23 16/7	24 12/12	20 9/11	22 8/14	19 10/9
いつのまにか少女は	8 5/3	21 7/14	17 7/10	23 13/10	27 11/16	22 12/10	18 12/6	12 8/4

〈注〉・生徒数　四学級152名（男子78名・女子74名）。
・順位番号は、それぞれの詩に対して生徒が評価した順。

・左側数字が票数。右側上は男子、右側下が女子。

以下、この表にもとづいて、生徒たちが好む詩について解説を加えてみたい。

まず、最も人気を集めた詩は、一位二位併せて59名(39%)の票を集めた「虫けら」である。この生活詩に対する人気は、特に男子生徒に集中しているのが特色である。どういう点でこの詩が好まれたかについて、グループごとの発表の際使われた生徒の発表メモを手がかりに探ってみると、次の点があげられるようである。まず、〈題について〉は「虫けらという言葉がそぼく」。〈気に入った所〉としては「おまえは、おれはを多くくりかえしておもしろい。表現がたのしい。最後の『やっぱりおれは土をたがやさんばならんでや』と話しかける感じのところ。」と指摘している。また、〈味わい所〉として「現代の農業は、作物を多く作ったりするために労働力を使わない機械化農業に変わり、今では畑の中の虫も存在しないものではないだろうか。しかし、昔は一くわ一くわ一心動体になり、作物が多くできれば感謝し、虫の存在も大きなえいきょうだろう。そういう、昔の百姓の気持ちにならないとこの詩は味わえないだろう。」とまとめている。この詩の作者大関松三郎について、後に補説してやると、生徒たちは自分と同じ年齢だった作者を想い、大変驚いたようであったが、ますます親近感を覚えた様子であった。しかし、この詩に対しては、生徒たちの鑑賞レベルはまだ浅くとどまっていた。単に表現上のおもしろさ、素朴さのみに興味を示し、「おれ」の「やさしさ」は指摘できても、そのやさしさが生活(労働=生きること)の必然に支えられた心の葛藤から生まれていることに気づくにはもう一歩、力量不足であったようだ。ともかく、この詩の生活に根ざしたドロくさい世界が、生徒の興味を強くひいたのであろう。さらにこのことは、男子にその傾向が強いこと、そして女子にはあまり人気のないことと併せて注目しておくべきことである。

次に人気の高かったのは、「ぼくはしなない」である。女子生徒には多少好悪の評価が分かれたようであるが、男子生徒には比較的人気が高い詩である。この詩については以前、テレビで放映されたことがあり、かなりの生徒が『ぼくは12歳』(筑摩書房)という詩集と、わずか12歳で大空に投身した岡真史君のことを知っていた。この詩に人気が集まった理由は、詩作品そのものに対してというよりも、むしろそうした詩の背後にある同年齢者の死という現実に関心がむけられたことにあるのではなかろうか。生徒はこの詩自体を難解と感じながらも、この詩にまとわりつく死の影をはだで直感しながら、その死の意味を探ろうとしているように見えた。最初、生徒たちは「死なないといったのに死んだのはなぜか」という素朴な疑問を出発点にして、次第にこの詩の一行一行に感じられる作者の心の迷いを理解していったようである。そして、最終行の「じぶんじしんだから」という切迫した緊張感を〈味わい所〉としてあげているグループが多かった。また同時に、作者の岡真史という少年の人物像を探ることに関心が向けられ、ある女子生徒は彼のことを評して「学校では明るく人気者、家では一人で部屋にとじこもって、何を考えているかわからない子」と推測して述べている。

三番めに人気を集めた詩は「木琴」である。この詩は前の「ぼく

はしない」とは逆に、男子生徒にはさほど好まれないが、多く女子生徒に好まれていることがわかる。この詩は比較的テーマがはっきりしており、戦争によって奪われた妹に対する兄のやさしさに包まれた哀惜の情が、語り口調の静かな響きをもってうたわれているがために、多く女子生徒の心をとらえたのであろう。戦争という現実を底流においた深く静かな悲しみ・やさしさは構図として形象化しやすく、生徒は、「まどガラスを通して雨のふる夜の空をながめている」などという情景を自由に浮かべるのである。リフレインを使ったこの詩の、小波のような静かなリズムも好まれたようである。

四番めは「ぶどうの房」である。前掲表を見てわかるように、女子生徒に圧倒的な人気を集めている一方、男子生徒には最も人気の悪い詩である。

みつはしちかこの『小さな恋のものがたり』（一～十二集、立風書房）という詩画集は、数年前より中学生から大人にいたるまでの多くの女性に愛読され、今だに静かなブームが続いているほど〝チッチとサリー〟は親しまれてきた。この「ぶどうの房」の詩は、詩画集『チッチとサリー』（立風書房）に収められているものから採ったが、以前から私の学級文庫に入れておき、女子生徒からひっぱりだこにされるほど親しまれていたために、余計にこの詩に人気が集まったのかもしれない。

男子生徒がこの詩を避ける理由は、はっきりしたことはわからないが、おそらくこうした少女趣味的な詩の世界に気はずかしさのまじった反発を感じるのではなかろうか。異性世界に妙に反発したがる年ごろだからである。他方、女子生徒はこうした淡い恋の純情にストレートに共感する傾向をもつらしい。生徒の発表メモを見ると、「自分がちっぽけなそんざいで相手の人にはわからない」〝チッチ〟と自分とを同化させ、「これは初恋で片想いの詩です。それで初恋をとうの昔にとおりすぎた人や、また初恋をしたことのない人もこの詩をよんで思いだしたり、味わったりして下さい。」と発表原稿をまとめている。ともかく小むつかしげに腕組みをして思索し鑑賞するといった類の詩と異り、こうしたメルヘン的で少女の淡い想いをそのまま描いたような詩が、生徒の日常の詩世界に大きな位置をしめていることは確かなようである。

五番めに選ばれた詩は、石川啄木の短歌集『一握の砂』の中から採った「いのちなき砂のかなしさよ……」である（前掲表には「一握の砂」と略称してある）。短歌をアンソロジーの中に入れてみたのは、中学一年生の生徒たちが、こうした韻文定型詩にどこまで耐え得るかを試みに見たかったためである。予想通り、一部の生徒が強く興味を持ったのに対し、あとの生徒は十分に理解できずに、好きでも嫌いでもないという反応を見せたと言ってよい。表に見る通り、評価に散らばりが平均していることからそのことがうかがえるのである。興味を示した一部の生徒は、この短歌をどう受けとめているかというと、この短歌は「短いから、長い詩より砂のかなしみがよくわかる」とか「行間を読む楽しみ」があるなど、比較的言語センスのよさを感じさせるような答えを返してきた。しかし、その他の生徒は「短い文でよく表わしている」、「昔の言葉で表わしている」、「砂に命がないことをかなしく思っている」など、表面的なところでしか接点を見いだせないのである。この短歌の意味にし

ても、まだ作者研究の方法を知らない生徒たちであってみれば、「砂＝作者」という内部形象にまで立ち入って鑑賞することは難しく、ほんの一部の生徒が、啄木についてやや詳しく調べ、『一握の砂』の中から他の短歌も紹介しながら、作者の生活側面にスポットをあてた発表ができたのみであった。啄木その人の生き方を理解できる年齢に達していない生徒たちであってみれば少々無理のある教材なのかと思われた。

六番めに選ばれた詩は「いつのまにか少女は」である。これは、六、七年前にフォークシンガー井上陽水に歌われてかなりヒットした曲の歌詞であり、当時は、陽水の歌うフォークソングが多くの若い世代の心をとらえていたものである。私自身もまだ大学に入学したてのころで、そうした陽水の世界に理屈抜きで惹かれた若者のひとりであった。

ところが、今の中学生にとって陽水は受けが悪く、知らないという者もかなり見うけられた。したがって、私個人の趣味によって選んだこの詩は通用しなかった。詩の意味自体もあまり鮮明でないという印象が強いようである。単に、「君は静かに音もたてずに大人になった」というところが「男の悲しさ」を感じさせていいという反応が返ってきた程度で終ってしまった。現代の中学生が、からだ全体で感覚的に受けとめているフォークの世界（その詩世界）――例えばアリスやさだまさしが歌う青春の断面――を別の形で探ってみる必要があるようである。

七番めの詩は「赤いタビ」である。一位から八位に選んだ数が平均的に散らばっていて、好きでも嫌いでもない、すなわちあまりよくわからない詩として評価が下されている。この教科書教材に対しては、生徒の一読にはあまり強い印象をもたれなかったようであるが、この詩の単元の授業の一時間を使ってやや詳しくイメージ化をさせてみたところ、比較的鮮明な情景イメージと、最終二行における主題がらみの問題点が多少浮かびあがり、本来鑑賞に耐え得る作品ではないかと思われた。ただ、生徒の一読にはさほどの人気が得られないというのが、今回の数字にあらわれた結果なのである。このばあい考えられることは、詩がわかる＝おもしろい、という構造も、多面的にとらえないで、生徒の一読にその規準をゆだねてしまうには大きな問題点が残るということである。

さて、最後に、最も人気の悪かった詩が「はる」である。この詩は、私の予想外に人気が出なかった。その原因にはいろいろ考えられるだろうが、私の印象では、ひとつにはこの段階の中学生は観念上の世界にはあまり強い興味を示さないのではあるまいかということである。あとで詳しく述べようと思うが、観念上の世界よりも、より具体的な世界に自らの接点を求めようとする心の動きがあるのではないかと感ずるのである。

ただ、少数ではあるが、この詩を一位に選んだ生徒のグループは、私にとっては興味深い読みを示してくれた。以下、発表メモから二、三ひろいだしてみると、「読んでいると、自然ととけこめるのがいい（自分までが空の上へ登っていく感じがする）」、「楽しそうで天国にいっている感じする」など、作品世界をよく形象化していたり、またグループの代表朗読に際しての注意メモだろうと思われるが、「感情をこめてすいこまますように」とあるように、表現

よみのための配慮がうかがわれて興味深い。このように、少数ではあるが、グループ内で詩の観念世界を楽しく読み味わっている例が見うけられたのである。

さて、以上に、前掲の表に従って、生徒が好む詩について順番に解説を加えてきた。ただ、この調査においては、好きな順に詩を並ばせてみただけであって、「好き」ということがどういうことをさしているのか、その中味が問われなければならない。その点で、私の調査は厳密さを欠いていることを言い添えておかねばならない。しかし、この調査の結果、概ね次のことは引き出せそうに思う。

ひとつには、この複雑な現代社会に生きる中学生であるがゆえに、生徒たちの関心がより現実的な問題に傾斜しているのではないかという点である。このことは、岡真史の「ぼくはしなない」や金井直の「木琴」が、多く生徒たちに好まれていることからうかがえるのである。

ふたつには、谷川俊太郎の「はる」に形象化されているような、自然に取材した観念上の世界には生徒はあまり積極的な興味を示さないということである。それとは逆に、大関松三郎の「虫けら」のように、具体性をもって生徒の感性をとらえるような素材性のある詩は多く人気を集めているということである。

以上、ふたつのことは、中学生の発達段階とのからみ合いのなかで考察しなければならないことは言うまでもない。通常、中学生時代を一年から二年にわたる前期の時代と、二年の後半から三年にまたがる後期の時代とに分けて考えるむきがあるが、そのふたつの時代における生徒の認識力や感情世界の拡がりや質の違いには大きな差があることはよく指摘されるところである。〈注1〉したがって、そのような生徒の発達段階も考慮に入れて、再度、私の調査結果をふり返ってみると、中学一年生は、現実的・具体的な認識の方向性、つまり素材のもつおもしろさや美しさなどなまなものに対して卒直に反応を示す一方、素材の内側をくぐり抜け触発されて、自己の内部に心の「ふるえ」を感じるような詩作品はまだ難しいということになろうと思われる。このことは、教科書教材である小野十三郎の「赤いタビ」を授業で取り扱ってみて、作品の主題ともいうべき内部形象には理解が及びにくいということからも実感されたことである。

今後、以上のことを考慮に入れて教材選択の観点としなければならず、そのばあい、教科書教材をそのまま無批判に教室に持ち込む前に、現代に生きる中学生の認識傾向との接点を十分に考えなければならないということを確認すべきなのである。現在の教科書における詩の取材の角度が、多く自然に傾斜しており、「自然を単に感性としてとらえたり、また叙情の世界としてとらえている」かたよりが、「かげ深い現実の状況のなかに育ち、思考をつみかさねてきた生徒たちに、どのような生きたいのちの点火をすることであろうか」という指摘〈注2〉にも十分応えていく努力をしなければならないであろう。

二、中学生の精神発達と詩
——創作指導を通して——

詩の指導に際して、現代に生きる中学生の精神発達の段階を見きわめることの重要性は前に指摘した通りであるが、実際にそれを見

きわめようとする作業は、大変困難であるにちがいない。青年心理学その他、様々な角度からそれを見きわめていかなければならないだろうが、ここでは詩の創作指導によって得られた生徒の作品を通して、中学一年生に限ってその問題を考えてみようと思う。

十一月にアンソロジーを作らせたときに、試みにそのアンソロジーの最後に「私の好きな詩」、「私の作った詩」を書けという二つの課題も加えてみた。詩の創作については、強制はしなかったが、半数以上の生徒が書いてきた。中に、興味あるすぐれた生活詩などが見られたが、それはごく少数で、あとはものまねであったり、断片的であったり、概念的なことばの寄せ集めであったりする作品が多かった。詩表現の手段も十分理解できていないし、対象を自己の内部にひきすえて見つめる力がまだ弱いので、せいぜい発想の面白さ・新鮮さが目立つ程度のものであった。ちなみに、「私の好きな詩」として選ばれた詩の中に、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」が申し合わせをしたように多く見られたが、これも素材のもつ純粋さに直線的に魅かれるこの時期の生徒の認識力を反映していると見るべきであろう。

次に、年が明けた二月に「言葉を選んで——詩を書く——」という教科書の単元に入ったので、そこで詩の創作過程を理解させ、自己表現を工夫させることに主眼をおき四時間の授業をもった。最初の二時間を使って、生徒に十数編の多彩な詩をプリントにして配り、詩の概念を押し拡げながら紹介し、創作過程を理解させていった。これが効を奏したのか、結果として得られた生徒作品は前回より質的な向上が見られた。

次に紹介するのは、そうして出来た生徒の詩の一部である。

仮面舞踏会　　田村恵理子

この世は仮面舞踏会
みんな美しい仮面をつけて
クルクル踊っている
仮面の下にはどんな顔？

やや舌足らずの形で終ってしまっていて惜しいが、現実批判の精神がこういう比喩の形をとって表わされているところに注目したい。〝作品ノート〟として書かせた〈特に書きたかったこと〉の中に、この女子生徒は、「この世でみにくい心やいやしい心を持った人が、人前ではその心をかくして他の人とは、私は美しい心を持っています、というような顔をして話しをしている。だから、そんな人達に本当の心はどんな物かと聞いてみたい。」と述べている。これは、社会批判の眼が芽ばえてくる中学生一般が抱き始める考え方を代表するものであるが、この女子生徒のばあいには、それが同時に自己の内側で除々に動き始めた精神のひずみとしてとらえられているのである。彼女が、「私の心にあるみにくさやいやしさなど」を中心に書きたいと〝作品ノート〟の中に述べていることから、そのことがうかがわれるのである。また、同じ時期に書いた作文に次のようなことを述べている。少し長いが紹介してみよう。

中学生になってからの私　　田村恵理子

私は、中学生になってから、六年生のころに比べると、大分性格が暗くなってきたと思う。

六年生のころは、友達とワイワイさわいでいたのに、今は休憩時間になれば本を読んで、みんなの中に入っていこうという気持ちがなくなった。

それに、授業中でも全然発表しなくなった。六年生のころもあまり発表しなかったけど、中学生になってから、それがもっとひどくなってきた。

それに、班学習の時も積極的に発表しなくなった。六年生の時は、班学習となるといろいろ意見を出していた。それなのに、今はみんなの意見を聞いて変だなと思えば意見を言うだけで、ほとんどだまってみんなの意見を聞いている。

それに帰るときも同じだ。帰るときはいつも、六年生の時から仲のよかった人と帰るけど、その時でもよくだまっていることがある。六年生のころは、私が中心になってさわいでいたので、いっしょに帰る友達に「どしたん。今日は静かじゃね。」と、よく言われる。

こんな感じで六年生のころに比べると、大分性格が暗くなってきている。今の私は、自分一人のカラの中に閉じこもっていて、そのカラを割って、みんなの中に入っていこうとしない。でも、これでは他の人は、なんか話しにくい人だと思うだろうし、心もせまくなっていくような気がする。

（後略）

まさに、一個の自分が主体として変化していくその胎動を、この生徒なりに自己矛盾として感じとっているわけであり、そういう主体的条件が、現実社会という客体と微妙に接点を持ち始めようとしていることを、この生徒は短かい詩の中に表現しているのである。

もうひとつ、次の詩は、前詩と同じ意味で成長のひずみのなかで喘ぎ始めた男子生徒の叫びである。

無題　　雲津　通

オレは何故生きているのだろう
　これといって
　やりたいことがあるのではないし
　他人のために生きているのでもない
オレは大人がつくった
社会に飼われているペットなんだ
オレは雲津通という名前の物体が
　この世にあって
　それが家庭や社会に従って動いている
　ただそれだけのこと
オレはいつか死ぬ
　意味もなく生まれてきたように
　意味もなく死ぬ
飼い主の監視のもとで
　静かに死ぬ

さらに、〝作品ノート〟には次のようにしるされてある。

「すべてのことにやる気をなくし、大人がつくったつまらないレールの上を何のていこうもできないで、ただバカバカしく歩いていく。そしてやがて死ぬ。まちがった社会に、何のていこうもできないで、ただ、レールの上を毎日、同じ調子で歩いている。そんな自分の人生がどんなになさけないかを書きたかった。」

この男子は、私の担任しているクラスの生徒であり、一時、問題行動にまで及んだことのある生徒であるがゆえに、こうした詩をつきつけられたことは、私にとっては心寒くつらいことであった。二学期の半ばより寡黙になり始めた彼の心のひだを、こうした寒々としたかげりが深く覆い始めていたのだった。

ともあれ、やや誇大された虚構世界にひたりきっている感もなくはないが、こうした現実社会に自己の置き場を見失って喘ぐ声を、心を研ぎ澄まして聞き取ってやらねばならない。

以上、生徒の二作品について、中学一年生の精神発達とのかかわりでその解説を加えてみた。ここで注意しておきたいことは、この二人の作品をもってして、中学一年生一般に拡大した精神発達を論じることは慎しまなければならないとしても、他の生徒に比して精神的な発達を早くとげているこの生徒たちにこそ、成長過程の一歩先を見取らなければならないということである。先に、私は中学生の精神発達を前期と後期に大別する見方を示したが、あえて言うならば、この二人の生徒にこそ、発達の前期から後期への移行の微妙な動きを察知すべきではなかろうか。そして、そのように成長のひずみのなかで、綱渡りとも言うべき刻々を過ごしている中学生の認識・感性のどこに、いつ、どのようにして分け入って行けばよいか、詩教育の営みはかくも緊張に満ちた課題をつきつけられているのではあるまいか。

〈注1〉『講座・日本の文学教育5中学校の文学教育』（日本文学教育連盟編・一九六七年二月・新光閣書店）などに詳しく論じられている。

〈注2〉同書19ページ「中学校の文学教育はどうあるべきか」（久米井束）

（一九八〇・三・三〇）

（広島市立亀山中学校教諭）